

高堂要著

椎名麟二論

その作品にみる

新教出版社

著者 ^{たか}高 ^{どう}堂 ^{かなめ}要

1932年、倉敷市に生れる。1955年、東京神学大学卒。俳優座スタジオ劇団三期会、二月座、黒の会を経て劇団同人会。「たねの会」会員。日本キリスト教団 三鷹教会会員。

主要戯曲に、「白い墓」、「よいやさのよいやさ」、「どんま」、「黒と白と赤と青の遊戯」など。著書に、『物・魂・ごっこ——戦後戯曲論ノート』。共著に、『文学入門』、『太宰治と聖書』、『ジャンル別近代日本文学史』、『方法としての戯曲』など。

現住所 〒188 田無市谷戸町1-15-4

椎名麟三論

©1989

1989年2月25日 第1版第1刷発行

著者 高 堂 要

発行者 森 岡 巖

定価2400円

印刷所 東京創文社

発行所 株式会社 新 教 出 版 社

東京都新宿区新小川町8の1

振替・東京 8-9991 電話03・250-6184

長陽社河田製本

ISBN 4-400-61465-4 C1095 (配給元・日キ販)

高堂 要 著

椎名麟三論

この作品にみる



新教出版社

椎名麟三論／目次

1	廃墟の呻き——序に代えて……………	7
2	「状況の文学」の誕生——『深夜の酒宴』……………	18
3	陋劣への笑い——『重き流れの中に』……………	32
4	「虚無」と「神」との相撃 ^{あいうち} ——『深尾正治の手記』……………	45
5	出生届と死亡届——『永遠なる序章』……………	60
6	「難民」群像と「大地」——『その日まで』……………	74
7	「完璧な死」への期待——『赤い孤独者』……………	88
8	「出会い」の喜びの表現——『邂逅』……………	103
9	死の支配からの自由——『自由の彼方で』……………	118
10	無意味な日常への愛——『美しい女』……………	133
11	罪における死からの赦し——『運河』、『神の道化師』……………	148

12	「モノ」の支配の貫徹とユーモア——『畏と毒』……………	163
13	終末における罪と自由——『長い谷間』……………	176
14	場の無い半端な仲保者——『半端者の反抗』、『媒妁人』……………	189
15	超絶対的なものの非人間性——『善魔』、『勤人の休日』……………	204
16	陰府よりの創造——『懲役人の告発』……………	219
17	超克不可能な課題——結語に代えて……………	240
	あとがき……………	255

Ⅱ 廃墟の呻き

——序に代えて

1

椎名麟三は、廃墟のた、だ、な、か、から誕生してきた作家である。見渡すかぎり瓦礫と灰燼の荒野と化した戦後日本の廃墟のなから、と同時に、あらゆる世界観、価値観、人間観、歴史観はもとより、生きる意味と意欲とを悉く喪失した、内なる廃墟のなから、作家椎名麟三は、生まれ出て来た。廃墟は、まず、作家椎名麟三を生む母胎であった。

7 廃墟における「最低辺の生活の日常と、一見それにそぐわぬところの根源への志向をもった観念的な思考とが、さながら廃墟のなかにおけるのつびきならぬ必然であるごとくに鮮烈に直結したところに椎名麟三の独自性が生れた」(『椎名麟三全集』第一巻解説)と埴谷雄高は述べている。廃墟において「最低辺の生活」を営む、廃墟に苛まれる肉体と、廃墟において、廃墟に促がされて「根源へ

の志向をもった観念的思考」をする精神とが、椎名麟三においては、「鮮烈」に「直結」したというのである。廃墟は、肉体的にも、精神的にも、椎名麟三を否応なく、独自の文学者として生育したというのである。

恐らく廃墟を俯瞰したり、あるいは、鳥瞰したりする視座をとることができず、ただただ地虫のように、廃墟を這いずりまわっていた椎名麟三にとって、戦災死や餓死をまぬかれて生きる一日一日が、この上なく貴重なものにも、また、全く逆に、際限なく無意味なものにも思われたであろう。生きていることの意義それ自体を見出すことができず、ただ地虫のように生きさせられていることに堪えられず、生の意義を根源から問い直さざるをえなかったのであろう。

「なぜ自分は生きているのだろうか。それは絶えず自分に立ち返って来る執拗な問いなのである。

自分は人類の歴史に失望し、人類の未来を信ずることは出来なかった。そして、ただ信じられるのは、人類の終末だけである。地球が冷え切った後に、何が人類にとって可能であろうか。まして人類の幸福や平和などという言葉を聞くと笑い出したくなる」（『永遠なる序章』について）と初期の椎名麟三は、自作について解説した一文で述べている。廃墟を母胎として文学を産み出して行こうとした椎名麟三に見えて来たのは、「人類の終末」であった。「人類の終末」とは、地球の廃墟、全世界の廃墟と言ってもいい。究極の廃墟である。

亀井勝一郎は、「椎名麟三は廃墟を描く名手なのである。市街の廃墟だけではない。人間の廃墟をみつめてきた」（『椎名麟三論』）と述べ、また中野好夫は、椎名文学の中にあるのは、「一切の思想

の無力さに絶望して、ただ生の不安と実存の重荷に呪縛されている廃墟的精神的風土、それだけに過ぎぬ」(新潮文庫版『重き流れのなかに』解説)と述べている。つまり、廃墟を母胎として産まれて来た椎名麟三の文字は、「市街の廃墟」と「人間の廃墟」を書き、「廃墟的精神的風土」を書いたというのである。それは、窮極の廃墟である、終末の相における廃墟であったと言ってもいい。廃墟のほかに描くものは何も無かったと言ってもいい。廃墟は、母胎である、と同時に、素材であり、描く対象であり、主題でもあったのである。

しかし、廃墟から出産して来た椎名麟三が、いかにして、廃墟を対象とし、これを描くことが可能になったのか。実は、それは、作者それ自体の内部に巢喰い、作者を絶望に陥らしめ、作者の内部を蝕んでいる、内なる廃墟が、作者を全的に支配していたからではなかったか。いや、廃墟に全的に支配されていて、自己が廃墟そのものであるとの自覚が、廃墟という羊水のなかにひたりながら、廃墟を描くという離れ技を可能としたのではなかったか。

「僕に未来はない。そして過去はほろび去っている。ただ僕は一個の廃墟だ。その僕には、僕自身は既に発生に於てほろびていたのだという自覚だけが重く心を満すのである。運命をもった瞬間に僕はほろびていたのだ。今僕があるのは、ただ具体的な死へ存在している一個の廃墟に過ぎないのだ」と椎名麟三は、その初期の代表作のひとつ『重き流れのなかに』において、主人公でもあり語り手でもある、虚構としての「僕」に語らせているのだが、この「僕」の告白は、そのまま作者椎名麟三の内部の告白とみなすことができる。

この告白において、作者は、作者を産んで来た廃墟、作者その人がそうである廃墟、作者が描こうとした廃墟が、単に、戦後日本の一時的現象としての、外なる廃墟、内なる廃墟ではなく、もとと根源的なものであることを明らかにしている。単に満州事変、上海事変から日支事変、太平洋戦争に至る十五年戦争の結実として、一時的に廃墟が出現して来たというのではない。戦後の民主主義や共産主義、キリスト教や実存主義によって、治癒され、蘇生させられる一時的な精神現象として廃墟があるというのではない。

根源的には、廃墟は、原初において、すでに滅び去ってしまった廃墟なのだ。そして、いつまでもいつまでも、廃墟でありつづける廃墟なのだ。終末においても、滅んでしまったままの廃墟なのだ。

かくかくしかじかの理由や経過によって滅び去ったのだという、誘因や原因をもつ結果としての廃墟ではない。もとは、このような建造物であったが、今は壊滅し去ってしまった、何ものかの廃墟だということではない。過去もなく、未来もなく、ただ滅んでしまったまま、今、ここに在る廃墟なのだ。

ただ始末におえないことに、その廃墟が生きている。生きて、息をしている。「具体的な死」へ向かって、「モノ」でありながら、単なる「モノ」ではない存在として生きている。

芥川龍之介の文学が「老年」から始まり、太宰治の文学が「晩年」から始まったとは佐古純一郎の指摘するところだが、『純粹の探究』、椎名麟三の文学は、廃墟のただなから、廃墟そのものを母体として、廃墟そのものとして、「死体」として出生して来たと言えよう。「老年」や「晩年」は惨憺たる過去を引きずって余命幾許もないにしても、なお未来らしき何ものかを残しているのに比して、「死体」としての廃墟には、過去も、未来もすでにありはしなかった。

周知のように、敗戦後の廃墟のなかからは、幾多の文学が新しく出立して行った。しかし、椎名麟三のように廃墟そのものの発言として、己が母胎でもある廃墟を描いて出発した文学は、ほかに類例がなかった。敗戦直後、一九四五（昭和二〇）年から四八（二三）年にかけて、もともと華々しく活躍した、いわゆる「無頼派」の作家たちは、「あらゆる秩序・体制・権威・道徳・倫理の束縛から自由であること」を標榜し、「敗戦による価値観の転換に盲目的に追随する人々を論難嘲笑」し、戦前も、戦中も、戦後も変わることなく、「頼るべきところ」無く生きる自己を打ち出し（川嶋至『戦後』と無頼派の作家たち）、その意味で、廃墟のなかに廃墟そのものの如き自己を晒したとも言えるのだが、彼らにしても、椎名麟三とは、決定的に異なる、「頼るべきところ」の無い自己への自棄的信頼があった。

「無頼派」の代表的作家である坂口安吾は、その『墮落論』において、「戦争に負けたから墮ち

るのではないのだ。人間だから堕ちるのであり、生きているから堕ちるだけだ。……人は正しく堕ちる道を堕ちきることが必要なのだ。……堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」と述べ、堕落の極に徹することにおける自己の救済を謳ったのであったが、廃墟としての椎名麟三は、その時すでに、堕ちるべき余地は毛頭無いほど、堕ち切ってしまったといたと言えよう。堕落という、ひとつの価値判断を含む決意をする余地は、すでに全くなかったし、堕ちきった底の底に救いを見出しうる幻想をいだく余地も、すでにありえなかったのである。

したがって、椎名麟三の文学は、あらゆる過去の日本文学から断絶し、また、あらゆる同時代の文学から隔絶していた。その断絶と隔絶の、不連続の連続とも言うべきありようは、個々の作品を論じるなかで当然詳述されるのだが、まず概括的に述べておくならば、第一に、近代日本文学の屈曲せる「正統」であった自然主義的伝統の嫡子である私小説との断絶を挙げるべきであろう。葛西善蔵あるいは志賀直哉の流れを汲む、この私小説の王座は、敗戦によっても決して揺らぐことはなかった。

伊藤整の『小説の方法』の分析を借りれば、「小さな商業ジャーナリズムに支へられ、意識の上では、現世の秩序の外にある文士といふ一種の逃亡奴隷の自由生活の実践者」、「文壇生活をするといふことで現世的エゴを放棄したところの、自己放棄者」の私小説、あるいは、「文壇棲息者」でありつつも、「古い、無意味な、または非人間的な生活や肉親と調和し、和解し、決裂しまいとする」、「生活態度において調和者」である「仮面紳士」の私小説、その「逃亡奴隷」「仮面紳士」いず

れの、「文壇」を背景とする私小説とも、椎名麟三はつながらず、切れていたのである。

第二に、この私小説的伝統の上に立ちながら、戦後、「無頼派」、あるいは、「破滅型」の作家と呼ばれた一群の戦後文学とも、既に述べたごとく、椎名麟三は、絶縁していた。「一行の虚構」、
「一行の嘘も胸の中にはいった煤^{すす}のように思い、すべてお茶漬趣味」である「心境小説としての日本の私小説」「生活の総決算は書くが生活の可能性は書かず、末期^{まうし}の眼を目標とする日本の伝統的小説」の限界に挑戦し、「いかに生くべきかという可能性」、「自分の可能性」とともに、「自分の身辺以外の人間」の「可能性」を描く、「白紙にもどって、はじめて虚無の強さよりの『可能性の文学』」を目指した織田作之助（『可能性の文学』）とも距たっていたし、志賀直哉に対して、「孤高とか、節操とか、潔癖とか、さういふ讃辞を得てゐる作家に注意しなければならない。……潔癖などといふことは、ただ我儘で、頑固で、おまけに、抜け目無くて、まことにいい気なものである」と毒づき（『如是我聞』）、「日蔭者の苦悶」や「弱さ」や「生活の恐怖」に居直り、「落ちるところまで、落ちて行くんだ。理想もへちまもあるもんか」（『冬の火花』）と「弱者」、「敗残者」、「人間失格者」に徹し、そこから「道化」として出発しようとした太宰治とも異なっていた。

戦時中、日本文学を系統だてて読んだが、「自国の文学に全くエトランゼであることを知」らざれ、「感銘を受けた作品」もあるにはあったが、「ただそれだけで、僕の本質にまで及ぶ影響を与えてはくれなかった」（『蜘蛛の精神』）という椎名麟三にとって、坂口安吾や織田作之助や太宰治が反抗と攻撃と冒瀆の対象にした志賀直哉は全く問題にならなかった。「より深いより根源的な絶断」

が、そこにはあり、「旧文学、たとえば、志賀直哉」は、「戦後文学の関心」の中になく、「人間が、したがって世界」が問題だというのが椎名麟三の立脚点であった（『過去との断絶』）。

自虐のための自虐、苦悩のための苦悩を売りものにしているとしか見えない「過去の日本文学」、そこには許すことの出来ない醜悪なニヒリズムがある。私小説の殆どの作品を指して言っているのだ。そのリアリズムの精神は、人間の一切を虚無へ片付けることによって精神であったのである。しかしただそれだけだ。そして人々の虚無感情をひき出すことによって唯一の芸術的效果としているのだ」と椎名麟三は、「戦後文学の意味」と題する一文で、過去の、既成の、あらゆる日本文学との断絶を宣言している。やや氣負った、断定的な切り棄て方には問題は残るし、多様な断絶のありようは今後論究されねばならないのだが、確かに断絶は断絶にはかならなかった。中村光夫の言うように、「我国では自然主義時代からずっと続いている古いもの」としての「観念性」の偏重が、連続して椎名文学の中にも生き延び、「観念的心境小説」を生んだ、というのでは決してなかった（『独白の壁——椎名麟三氏について』）。

最後に、敗戦前からの、もうひとつの有力な潮流であったプロレタリア文学、社会主義リアリズムの文学との断絶を挙げておかねばなるまい。亀井勝一郎は、「椎名氏の文学的血統といったものを、我々に極めて近い作家に求めるならば、『党生活者』を描いた小林多喜二と、『人間失格』の作者としての太宰治ではなからうか」（『椎名麟三論』）と述べているのだが、戦後『近代文学』に拠った平野謙や荒正人の『党生活者』批判にもあるごとく、共産党という一つの組織絶対化から生まれ

る非人間性を、党への犠牲的献身として美化する視点から、また、「プチ・ブル・インテリゲンチアから前衛へと自己変革を身をもってなし遂げた作者（小林多喜二）自身の到達点」（小田切進）である『党生活者』の地点からは、椎名麟三は隔絶していたと言いつらざるをえない。

戦前からのプロレタリア文学の代表的作家の一人であった徳永直は、一九四八年、「現実からの遁走」という一文を草し、椎名麟三の文学は、「階級闘争は無意味であり、ブルジョワ支配は永遠不滅のもの」であるとし、「人類今日までの歴史で、原始状態からの脱却、たたかいによる進歩は、いっぺんにくつがえされ、逆戻りということになってしまった」と論難した。この徳永直の教条主義的マルキシズム理解の立脚点と椎名文学の位置とは、まさに無限に近い距離がある。

「プロレタリア文学は、正しい人間、前衛的な人間を描くことによって、その社会を批判する。しかしその正しい人間と僕たち労働者とは、現実には断絶している場合が多いのである。僕たちはプロレタリア文学が描く正しい人間ではあり得ないのだ。正しさが僕を文学に無縁なものにしていた」（なぜ作家になったか）という痛切な過去をもつ椎名麟三は、プロレタリア文学の影響から切断されて文学を志し、戦後においても、「いわゆる社会主義リアリズムの作品を読んで感ずる古めかしさや弱さは、社会主義リアリズムが、自然主義リアリズムの延長にすぎないということ、自然主義リアリズムの本質であるニヒリズムを社会主義リアリズムももっているということ、そしてその作品の主題が、革命的であればあるほどその方法のニヒリズムによって滑稽な矛盾となつて来ている」（一つの未来派的考察）と、根源的な絶縁を明らかにせざるをえなかったのである。